AMCoR

Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2006.12) 7巻1号:86~88.

第28回日本高血圧学会~学会報告と三つの副産物~

長谷部直幸

学界の動向

第28回日本高血圧学会 ~学会報告と三つの副産物~

長谷部 直 幸*

高血圧は、いかなる開発レベルの国々においても最 も頻度の高い生活習慣病であり、現在わが国では3700 万人、世界では9億7200万人の患者が存在すると言わ れています。試算によれば2025年にはその患者数は15 億6000万人に達するとされ、世界人口の30%が高血圧 患者になる時代が来るかもしれないとさえ言われてい ます (Lancet 365: 217-223, 2005)。その最大の理由 は、高齢化と肥満の増加にあります。近い将来、肥満 のためにアメリカ人の寿命は短縮に転じるであろうと 指摘されています (N Engl J Med 352:1138-1145、 2005)。内臓脂肪の増加(これを反映する腹囲で、男 性85cm、女性90cm (女性の基準は今後80cm程度への改 訂が予想されます)) を背景に、高血圧(130/85 mmHg以上)、高脂血症(中性脂肪150 mg/dl以上、 HDL-C (善玉コレステロール) 40 mg/dl未満)、高血 糖(空腹時血糖値110mg/dℓ以上)は同じヒトに集積す る傾向があり、これらのリスクの数が増えるほど動脈 硬化は進展し、脳卒中や心筋梗塞が発症し易いことが 知られています。そこで、これらの基準を満たす人々 を"メタボリックシンドローム"と呼び、早い段階か ら過食と運動不足の生活習慣を改善するよう働きかけ る方策がとられているわけです。このような背景を踏 まえ、わが国の高血圧治療のガイドラインが2004年暮 れに改訂されました。私も作成に参加させていただき ましたがJSH2004と呼ばれるそのガイドラインの中 で、最も強調されているのは「脳・心・腎などの臓器 保護のためには、より持続的かつ厳格な降圧を目指す べきである | というメッセージです。

第28回日本高血圧学会総会は、「高血圧・標的臓器障害の予防と徹底管理 -JSH2004 の活用 - 」をメインテーマに、旭川医科大学第一内科(現:循環・呼吸・

神経病態内科学分野) の菊池健次郎教授を会長として、 2005年9月15~17日の3日間、北海道旭川市の市民文 化会館と旭川グランドホテルの二会場で開催されまし た。例年10月に行われる本学会ですが、旭川での開催 に当たり会期を1ヶ月早めることと致しました。今回 の総会は、第7回日中高血圧シンポジウムとの合同開 催でもあり、国内はもとより、中国はじめ海外から 1600名あまりの参加者を迎えることができました。メ インテーマを展開するために、各々二つずつシンポジ ウム、関連学会教育講演、キーノートレクチャーを企 画し、高血圧を巡る今日的な論点に関するディベート も三題企画しました。菊池教授の会長講演では「高血 圧・標的臓器障害の予防 -成因・病態を踏まえて-と題して、旭川医科大学第一内科の基礎・臨床研究成 績を紹介しながら、動脈硬化・心疾患・腎障害など臓 器障害の征圧を目指す高血圧治療のあり方と方向性へ の提言がなされました。特別講演は、ハーバード大学 留学時代の私の恩師でもあり、現在米国ニュージャー ジー医科歯科大学の SF Vatner 教授が、「ストレス抵 抗性と長寿獲得に向けた新たな分子循環器学の展開」 について講演されました。

基礎シンポジウムは「基礎研究と大規模臨床研究の解離を埋める」ことを目標に企画され、「ARB は心筋梗塞を抑制できないのか」(光山)、「抗動脈硬化に作用し得る Ca 拮抗薬の作用は何か」(松岡) や「抗酸化・抗炎症機序を介する抗動脈硬化作用」(江頭)、「脳保護・認知機能保持に必要な薬理作用は何か」(堀内)や「新規糖尿病発症抑制に必要な薬理作用」(浦)の5演題を通して、基礎と臨床の成績の一致・矛盾点が浮き彫りにされ、今後の研究解明の方向性が明らかにされました。臨床シンポジウムは改訂された

^{*}旭川医大 循環·呼吸·神経病態内科学分野

JSH2004の徹底活用をテーマに、「JSH2004が強調する改訂点」(荻原)を網羅し、「生活習慣の修正」(安東)、「家庭血圧の活用」(今井(潤))、「腎疾患・糖尿病合併高血圧の降圧療法」(島本)、「脳血管障害の予防に向けた降圧」(島田)、「冠動脈疾患合併高血圧の至適治療」(長谷部)などについてディスカッションされ、特に腎臓学会から、日本人におけるGFR(糸球体濾過率)評価法の改訂について特別発言(今井(圓裕))がなされました。また、今回初の試みとして、高血圧治療の臨床的なリーダーでもある特別正会員(FJSH)を対象として特別シンポジウムを企画し、高血圧診療および高血圧学会の裾野の拡大に果たすFJSHの役割を論議していただき、将来の専門医制度化を視野に、その意義と今後の活動の方向性が確認されました。

関連学会の教育講演として、妊娠高血圧学会の佐藤 和雄理事長から「妊娠中毒症の分類・治療」について、 また内科学会から昨年第102回内科学会会長の松沢佑 次先生から「メタボリックシンドロームの診断と分子 機構」について解説がなされました。キーノートレク チャーIでは、家庭血圧測定の意義(今井)と正しい 測定法(栃久保)が解説され、Ⅱではわが国で進行中 の高血圧学会関連の8つの臨床研究(DIME(植田)、 CASE-J (荻原)、JATOS (石井)、VALISH (松岡)、 COPE(松崎)、HOMED-BP(大久保)、HOSP(河野)、 J-CHEARS (大内)) の各推進者からそれぞれの試験 の目指すものと期待される知見、さらにその意義がア ピールされました。ディベートでは、各々の演者が pro と con に徹することを原則に「超高齢者の降圧療 法は積極的に行うべきである (con 松浦 vs.pro 大内)」 「もう医師は診察室で血圧を測るべきではない (con 桑島 vs.pro 久代)」そして「脳卒中二次予防には利尿 降圧薬を使うべきである (pro 棚橋 vs.con 島田)」と いう現在議論のある三つの興味深いテーマが選択され、 白熱したディベートを通じて高血圧治療の問題点が浮 き彫りにされました。特に「もう医師は診察室で血圧 を測るべきではない | では、臓器障害合併頻度の高い 「仮面高血圧(診察室では正常血圧値で、家庭では高 血圧)」の診断の上からも、家庭血圧測定の意義が強 調されました。

今回のYIA は何れ劣らぬ学術的意義の高い5編の 最終候補論文の中から旭川医大の藤野貴行先生と筑波 大学の石田純治先生の二氏に最優秀賞が送られました。 Hypertension Research 誌に掲載された年間優秀論文を 表彰する Novartis 賞には 3 編の受賞論文の中から札幌 医大の荻原誠先生に最優秀賞が送られました。高血圧 学会の学会誌である同誌は、UMIN の ELBIS を介し て Web 投稿・査読が可能となり、国際化と同時に省 力化・迅速化が図られることになり、その経緯につい て特別報告をしていただきました。

一般演題として380題が採択されましたが、その内 20題の高得点演題に反映された高血圧研究の方向性を 見てみますと、腎、レニン・アンジオテンシン系では 遺伝子改変マウスを用いた基礎研究に加え、腎機能障 害時の血圧変動やコントロール不良の機序を解明する 基礎・臨床研究が報告され、JSH2004 における厳格な 降圧目標設定の理論的背景を強固にするものでした。 遺伝子解析では高血圧・動脈硬化の疾患感受性遺伝子 解析の最先端と現状が報告されました。インスリン抵 抗性に関わる新たな機序が報告され、骨髄幹細胞の機 能解析と脳・心筋虚血障害に対する血管新生療法が報 告されました。疫学・臨床研究では、J-LIT から糖尿 病合併例での厳格な降圧の重要性、J-TOPPから baPWV と微量アルブミン尿の関連性、大迫研究と健 康長寿計画から家庭血圧測定の意義が報告されました。 一般演題は、口演12、ポスター53のカテゴリーで発表 が行われましたが、口演では各セッションを代表ある いは総括するプレナリーレクチャーが5つ企画され、 各セッションの討議が活性化されました。

第7回日中高血圧シンポジウムは日本側札幌医大島本教授の「わが国におけるメタボリックシンドロームの実態とインスリン抵抗性」、中国側西安交通大学Zhuo-Ren Lu教授の「内因性ウアバイン物質の降圧薬としての可能性」の二特別講演を中心に日中3題ずつの口演が行われ、活発なディスカッションが交わされました。さらに、高血圧学会の international session との合同で海外から12題の口演と25題のポスター発表が行われました。

症例検討では内分泌性・妊娠関連高血圧の興味深い 4 症例を題材に詳細な検討が行われ、コメデイカル セッションでは、家庭血圧測定(石光)、和風 DASH 食(中井)、高血圧教育(神出)の各テーマで有意義 な教育講演が行われました。最終日午後の市民公開講 座では、例年の予定数を上回る400人の参加者を得て、 「沈黙の殺人者-高血圧の予防と管理」をテーマに、 飯村攻先生の「身近に考えよう-北海道における生活 習慣病」、阿部圭志先生の「家庭血圧測定のすすめー 降圧薬治療の効果を確実に知るためにー」、荒川規矩 男先生の「高血圧の治療のしかた」の三講演が行われ ましたが、いずれも的を射た分かりやすい講演であり 多くの市民から大好評を博しました。

旭川市では、旭山動物園が現在全国的に注目を集めており、学会の中でも同園副園長の坂東元氏から「旭山動物園の再生-伝えるのは命の輝き-」と題して、動物園や動物生態の範疇を超える組織再生の本質に触れる含蓄ある特別講演を伺うことができ、全国からの参加者に感動を与えました。会期中の天候は2日目を除いて若干不良でしたが、総会参加者も少なからず動物園に足を運ばれたようでした。

学会直前にわが国を襲った台風の影響で学会抄録集の配送が遅れるなど、思いがけない困難にも見舞われましたが、無事学会を終了することができました。本紙面をお借り致しまして、本学会の開催に際し八竹学長をはじめ旭川医大の皆様よりいただきました多大なるご理解とご支援に対して心より感謝を申し上げます。また、プログラムの作成、各種手配、連絡・確認作業などで私と共に毎日夜中まで頑張ってくれた副事務局長の福澤先生はじめ医局の多くの先生方、事務の皆様に心から感謝申し上げます。

本学会を機に、旭川市の中で三つの新たな展開を生むこともできました。ひとつは、市民文化会館の開場時間の変更です。従来の規定では8:30開場とされており、国際学会や全国学会など大規模学会の開催には大変支障が有りましたが、当時の菅原市長にお話し(ボ

ランティアとして市民街づくり計画検討会議の代表幹 事を務めさせていただいた縁で)したところ、利用者 のニーズに応える根本原則で、早朝の開場が可能にな りました。これ以降、学会などでの公的利用には市民 文化会館の早朝開場が可能になっております。二つ目 は、旭山動物園内で初めての学会懇親会を開催させて いただいたことです。海外では美術館・博物館など公 的機関を開放しての学会懇親会が珍しくありませんが、 今回、動物園の皆様に多大なご協力をいただき、初の 実験的企画として行うことを許可していただいたもの です。国内外の参加者から予想を遥かに上回る大絶賛 をいただきました。また、ノウハウを確立できたこと で、本学の先生方をはじめ旭川を会場に開催される学 会で同様の企画を実行することは可能であり、将来の ビジネスモデルとしても十分成立する可能性さえ実感 致しました。三つ目は、学会参加者の貢献の謝礼とし て、動物園の年間パスポートと共に、旭川ラーメンの 無料食事カードを発行できたことです。旭川ラーメン バーズという非営利応援団の方々と協力して、加盟 ラーメン店を募り、会期中カード持参者がどの店でも 自由に旭川ラーメンを食べられる仕組みを作り、これ も大変好評をいただきました。学会の本質以外の場面 でもこのような副産物を得ることができたことは、大 変有意義でした。

本学会の開催に際し学長をはじめ旭川医大の皆様からいただきました多大なるご理解とご支援に対して重ねて心より感謝を申し上げます。本総会が高血圧を初めとする循環器疾患の研究・診療のさらなる発展に寄与できますことを確信致しまして、学会報告記に代えさせていただきます。